

平和の剣、

特別インタビュー

藤岡弘

柳生新陰流。

柳生と私は、深い縁で結ばれているような気がしております。

十数年前、テレビ番組で柳生の里を訪ねたことがありました。さまざまな石仏があちこちに点在する柳生街道を歩きながら、昔この道歩いたであろう武者者たちを想像すると感慨を覚え、思わず武者震いしたことを覚えております。

その後、柳生の墓を代々祀る芳徳寺にも行き、ご住職にお会いしてお話しをうかがい感銘を受け、普段では目にできない柳生家に伝わる数々の秘伝書を見せたいことができずじまつていました。

そして十兵衛が建てた正木坂道場で、武道家としての藤岡弘を認めていただいた様な状況で、住職から直々に柳生新陰流の手ほどきを受けさせていただきました。

そして境内において真剣斬りの実演も許可していただく栄光を得ました。

実演の後に柳生家のお墓参りをさせていただいた時、歴代の人たちの魂の声がかえってきたような気がし、武者震いをしたことを思い出します。

この旅のすぐ後、TVの時代劇で柳生十兵衛役のお話をいただき、十兵衛や柳生新陰流と私には、浅からぬ縁で結ばれているような気がし、そしてまたもや今回、柳生十兵衛を演じることに。十兵衛や柳生新陰流を尊ぶ意味でも、今回の柳生十兵衛は、真剣や眼帯など、すべて本物にこだわって演じることにしました。

柳生十兵衛は、私が崇拜してやまぬ剣豪のひとりです。

武道家としての私が、とても興味をひかれ崇拜する剣豪が二人います。一人は宮本武蔵、そしてもう一人が柳生十兵衛です。この二人については、いろいろな資料や文献を読み漁り、現地を訪ねるなどして、ずっと研究をしつづけております。

一般には柳生十兵衛という名で知られていますが、十兵衛は通称。本名は柳生三藏。柳生十兵衛三藏は、江戸柳生においての最大のヒーローであり、柳生新陰流の創始者・石舟斎の再来と言われ、将来を囑望された人物でもありました。しかし徳川三代將軍・家光に奉公していたおり、家光の勘気に触れてしまい、怒りが解け、再び家光への出仕が許されるまで十二年。この空白期間が謎とされ、隠密説や探密説も囁かれて

小説や映画の題材にもなったのだと思いますが、この部分に非常に興味を持っております。

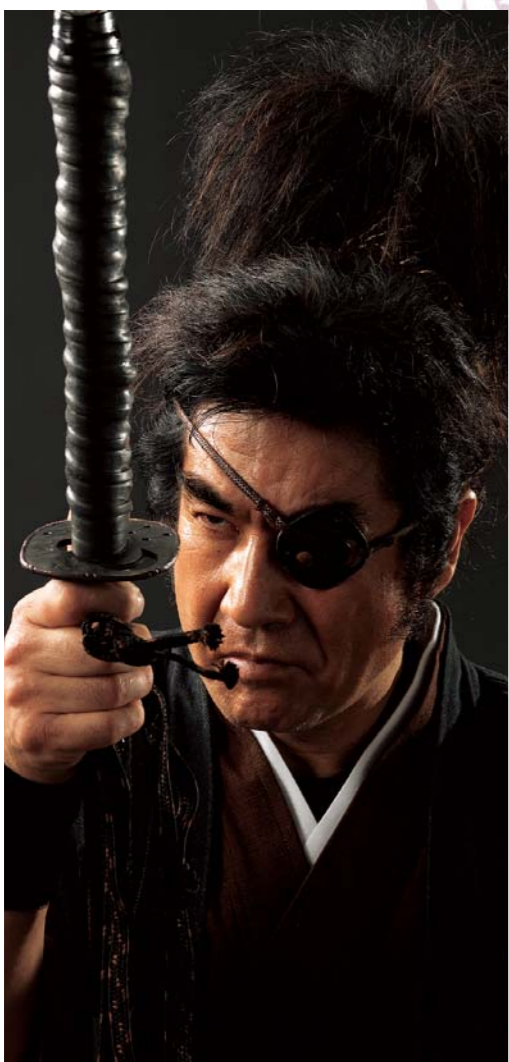
また隻眼（片目）についても、父・宗矩の投げた礫で片目を失ったという説をはじめ、実は両眼とも無事だったという健全説など、いろいろな説があり、こんな事柄をいろいろな想像するだけでもワクワクしてきます。

若い時から剣の才能に恵まれながら、性格は凶暴だったなどとも言われていますが、実際の十兵衛は兵法研究家だったのではないかと私は思います。なぜなら十兵衛は柳生新陰流の研究・解説書をたくさん残しており、私は芳徳寺のご住職から実物も拝見させていただき栄光をいただきました。

活人剣すなわち「切らず・取らず・勝たず・負けざる剣」。
私自身もそうありたいと、願っております。

いろいろな意味で、事実は小説や映画とは異なるものですが、柳生のイメージもまさにそうではないでしょうか。

柳生新陰流の創始者・柳生石舟斎宗蔵は、兵法家である上泉伊勢守の理念を受け継ぎ、無刀を工夫せよという伊勢守からの公案にみごとに応えました。新陰流に「無刀の位」の工夫を新たに加えて、平和の剣としての完成度を高めたのです。柳生宗蔵の「無刀の位」に感激した伊勢守は、「以後はばかることなく柳生流を名のれ」と、その功績により「柳生流」を名のることを許され、「柳生新陰流」の誕生です。柳生石舟斎宗蔵の兵法は、温良恭謙讓（穏やかで、素直で、うやうやしく、つつましいこと）を常とし、



藤岡弘、(ふじおかひろし)俳優・武道家

1965年、松竹映画にてデビュー後、青春路線で活躍。1971年、「仮面ライダー」で一躍ヒーローに。映画は、「日本沈没」「野獣死すべし」「大空のサムライ」他、TVは、「勝海舟」「白い牙」「特捜最前線」「あすか」テレビ朝日「藤岡弘、探検シリーズ」他、主演多数。1984年、ハリウッド映画「S.F.ソードキル」の主演に抜擢され、国際俳優としてUSAアクターズギルド(米国映画俳優組合)のメンバーとなる。[K2]「香港・東京特捜刑事」にも出演し、ハリウッド関係者との親交も深い。又、CMでは、セガサターン、オートレースで二年連続CM大賞を受賞。さらに、斬(真剣による演武)を行う武道家としても知られ、柔道、空手、刀道、抜刀道、小太刀護身道他、あらゆる武道に精通。又、民間ボランティア団体の理事も務め、メンバーと共に、国内はもとより世界数十カ国の紛争地域、難民キャンプにて救援活動を展開している。



日夜、稽古鍛錬工夫を怠らず、己を律する求道的な剣です。それが戦国の世に我が身を修める「修身の剣」として、剣を殺人刀から活人剣（かつにんけん）へと昇華させ、柳生新陰流を「切らず・（命を）取らず・勝たず・負けざる剣」として具現化させたわけです。その後、石舟斎宗厳の子であり、十兵衛の父である柳生但馬守宗矩が、さらに花を開かせ、柳生宗矩は、将軍家の兵法指南役として大目付の要職にもついた人物です。あの有名な僧侶・沢庵禅師に教えを請い、劍禅一如の崇高な剣の道の境地を切り開きました。宗矩は、宮本武蔵の「五輪書」と並ぶ「兵法家伝書」を残しております。

宗矩は政治家という一面もあったため、現代では陰謀などというイメージが強いのですが、私はそうは思いません。人の命を尊重する「活人剣」、徳川三百年を存続させた「兵法」。これらをあわせた柳生の剣こそ「平和の剣」であります。私は、徳川三百年の存続は、柳生の存在があったからだと思ってしまう。

私自身まだまだ修行中の身ですが、この教えを骨身に刻んで修練に励みつけたいと思っております。

最近の日本社会は危機に瀕している… 若者達には、サムライの精神で精進して欲しい、未来の為に

近年、世界的に武道ブームが巻き起こっていますが、惜しいことにその精神を真剣に学ぼうとしているのは、外国人の方が多いようです。今、日本は混沌とし、まさに危機に瀕していると感じております。

私は若い頃から今日まで、ボランティア活動や探検などで、世界数十カ国駆け回ってきました。本当に危険な戦地から飢餓に苦しんでいる国など、悲しみや苦しみもこの目で実際に見てきた中で思うことは、「日本は今のところ飢餓も戦争もないが、本当に大丈夫なのか、危機感がなさすぎるのではないのか。」

私は普段から「世界の平和」を心より願っておりますが、大げさではなく、世界を見て回ってきたからこそ言いたい。「日本よ、武道精神で危機を乗り越えろ」と。

「日本人は平和ボケしているとよく言われますが、実際にそう言われても仕方がない。」日本の国

中に蔓延している無気力、無感動、無関心、無目的ともいえるべき症状は、確実に日本という国を蝕んでいます。特に未来を支える若者達が、そのような状態にあるようで大きな問題です。

日本の平和。未来永劫続いて欲しいものです…。しかし平和とは、何も考えずに漫然と過ごし、のんびんだらりと日々自堕落でいて、それで永劫に続いていくのでしょうか。答えは「否」です。備えなき者、備えなき民族に未来はないのではないのでしょうか。

平和の中にあっても有事のことを忘れず、犯罪にも天災にも戦争にも、常に備えを怠るなどというのが、武道の教えです。

日本は現在不況とはいえ、まだまだ絶大な力を誇っています。経済面でも、学問・教育面でも科学技術の面でも、世界の国々の中で最先端を走っているものが数多くあります。

とはいえ、これらの「力」は果たして十分に活



こそ活人剣として人が動き、モノが動き、新技術が開発され経済も豊かに円滑になっていく。その先にこそ「平和」があるのだと思います。

合掌、 藤岡弘、

「愛」と

「平和」が

全てなのです。

かされていると言えるでしょうか。柳生流の活人剣のように用いられているのか、国内外問わず、貧しい人たちのため、困っている人たちのために、また世界の平和を守り、維持するために活用されているでしょうか。

反対に、経済力や科学力にものを言わせて、途上国の人たちを顎で使うようなことをしていないか。

現状を見るにつけ、日本の「剣」が活人剣として十分に活用されているとは、残念ながら私には思えません。

「剣」すなわち力は、人を活かすもの、人を包み込むもの、人に愛を与える、人に安心を与えるものでなければなりません。今まさに私たちは、柳生の活人剣の教え「武士道に学ぶ時ではないのか。」

二十世紀は経済中心主義の時代でありましたが、私は、二十一世紀は「心・中心の時代」にすべきだと思っております。

まず人の心の豊かさを考える。人や社会のことを考える。どうしたら多くの人が安心して、幸せになれるのか、そこに価値の中心を置く。そうして

